



Title	石川明人『キリスト教と戦争「愛と平和」を説きつつ戦う論理』（中央公論新社 二〇一六年）
Author(s)	辻, 隆太郎
Citation	基督教學, 52, 37-40
Issue Date	2017-07-07
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/70090
Type	other
File Information	04tsuji.pdf



[Instructions for use](#)

石川明人『キリスト教と戦争』

「愛と平和」を説きつつ戦う論理

(中央公論新社 二〇一六年)

辻 隆太郎

キリスト教は愛と平和と唱えながらなぜ戦争をするのか。人々が抱いているであろうと著者が想定するこの疑問に対し、本書はキリスト教と戦争・暴力の単純ならざる関係を解説している。本書の対象は研究者ではなく、キリスト教に関心はあるが詳細な知識はない一般読者であるため、本書評もその視点から感想を述べることにしたい。

まず、本書の構成を確認しておく。

序章では、おそらく本書が想定する「一般の人々」のキリスト教平和主義イメージに近いものとして、アーミッシュの犯罪加害者に対する「赦し」の事例と、戦争

との結び付きの目に見える事例として、アメリカのチャレン制度が紹介される。そのうえで、アーミッシュの事例のような絶対平和主義はむしろ例外であり、キリスト教徒の戦争や暴力に対する態度は多様であることが示される。これらのことは繰り返し強調されている。

第一章ではカトリックが、第二章ではプロテスタント諸派が、正戦論や信仰のための戦いなどによって、戦争をどのように容認したか／しているかを見る。第三章では聖書の記述が、暴力の否定であれ肯定であれ、その權威によって自説を補強することが簡単にできてしまう代物であることを示す。

第四章では、初期キリスト教が軍隊とどう関わったかを論じる。ローマとの関係においては、キリスト教徒が軍務に就くことの葛藤が、非暴力主義によるよりは、ローマ軍の宗教性によるものだったこと、公認宗教となつてからは、兵役は当然の義務だと見なされるようになったことを明らかにする。また、戦争と軍務に関しての教父たちの思想を紹介し、キリスト教が初期段階から条件付きの戦争や暴力を正当化していたことを論証す

る。

第五章では、修道院文化と軍事の親和性を中心に、信仰と軍事の両者は常に対立的だったのではなく、信仰を精神的な闘争として、重ね合わせられる傾向さえあったことを示す。

第六章では日本に焦点を当て、内村鑑三の非戦論と彼の軍人に対するシンパシー、旧日本軍内部でのキリスト教伝道などが紹介された後、戦後の各キリスト教組織による、戦争責任告白や平和に関する公式見解が検討される。それらの「平和」を求める声明は、正戦論や正当防衛を認める考えには触れず、現在と未来の平和を求めるならば無視できないはずの現在の軍事状況への言及も乏しいと、手厳しい評価が下されている。

終章は、キリスト教に限定されず、宗教と戦争はどう関わるのか、人はなぜ戦争をするのか、を考察する。著者は、平和を望む気持ちと戦いを決断する気持ちの間に、根本的な違いはない、と指摘する。戦争にあるのは単に損得勘定、悪意、狂気のみではない。平和や善や実存的意味のために人は人を殺せる。愛情や優しさが戦争

を正当化することもある。戦争とは何かという問いは、人間性そのものへの問いでもある、と著者は述べる。

当初の問題設定、キリスト教は愛と平和と唱えながらなぜ戦争をするのかという疑問は、本書の議論を経て、その疑問と前提となる認識の単純さ、粗雑さが厳しく批判される。そこで提示されるのは、愛と平和と唱えることと戦争をすることは必ずしも相反するものではなく、むしろ愛と平和が戦争とも結びつき得るという現実である。そして、それから目を逸らした平和の訴えは非現実的である、と批判する。

キリスト教、戦争、そして平和主義に対する、単純あるいは一面的な認識についての批判的考察は、もっと直截に表現してもよかつたのではと思うが、十分に伝えられている。ただ率直な読後感を言えば、本書の主張に大きな異論はないものの、何か腹に落ちない感覚が残るのである。その理由を示すのが本来この書評の役割だと思うのだが、結局うまく言語化できずにいる。ただおそらくは、本書の議論の前提を、私が十分に共有できていないことが一因だろう。

本書では、一般の非信徒はキリスト教を平和主義とイメージしている、との前提に立っている。「キリスト教徒たちは、皆が静かに優しく愛を説く、おとなしい雰囲気の人たちばかりだったわけではないのだ」(151頁)などである。これがどれほど妥当なのか、やや疑問がある。確かに、「右の頬を打つなら、左の頬をも」といったイエスの言葉と、十字軍や異端審問などを比べて指弾するのは、キリスト教批判の常套ではある。しかしそれは、「キリスト教は平和主義なのに戦争をしている」というよりも、「キリスト教は平和主義とは言えない」という批判、つまりキリスト教に戦争を容認する側面があることを知らないのではなく、認識したうえで否としているのではないか。「一般の人々」のイメージは、そこまで単純で単純だろうか。自身がキリスト教徒であり非信徒の学生と日常的に接している著者の想定は、おそらく私のそれよりは実情に近いのだろうが、「一般の人々のイメージ」をどう見積もるかは難しいはずであり、それを納得のいく形で示してほしかった。

次に、本書における平和主義のイメージは極端なので

はないか。このことは、信仰と軍事的比喩を巡る論考とも関連する。著者は、愛と平和の「信仰」が逆説的にも「戦い」のイメージで語られることを示し、それは単なるレトリックではなく、実際に戦闘的なイメージで信仰を捉えていたのだと論じる。その点に異論はない。しかしこれが、平和主義と背反するものだろうか。「武器を捨て、信仰をもち、具体的な暴力は禁じられるようになったら、戦闘的精神そのものは信仰と矛盾することなく生き続けた」(156頁)のであれば、それ自体は非暴力主義のあり方としておかしくはない。平和主義が必ず「静かに優しく愛を説く、おとなしい雰囲気」である必要はない。暴力的な匂いが少しでもするものは純粹な平和主義ではない、と著者が実際に考えているとは思わないが、短絡的な平和主義者に対する著者のいら立ちが、平和主義そのものに対する記述をやや一面的にしているように思われた。

最後に、本書は「戦争と平和の問題に対するキリスト教徒の態度は、決して一様ではない。同じ信仰の持ち主の間でも、実際にはさまざまな葛藤があるのだ」(101

11頁)、といったことを繰り返して強調している。信仰は単なる個人の心の問題ではなく、社会のあり様とも密接に関係する。「困難な現実のなかでどうにかやっていこうとするのが、キリスト教徒たちの現実であり、人間の現実なのである」(70頁)というのは、その通りだろう。宗教の本質を示すことが難しいように、キリスト教の本質を断言することも困難だろう。キリスト教の多様なあり方を提示するしかない。それは承知の上で、ではキリスト教とはいったい何なのか、という素朴な疑問は残る。著者は「食うか食われるかの壮絶な状況下で純粹な平和主義を貫けなかったとしても、それはキリスト教徒として非難されるべきことなのか」(67頁)と言う。不可能な愛の命令の前に、人間の限界を考えればそう言わざるを得ない。しかし、平和な時には平和を、戦争の時には戦争をただ正当化するのであれば、それは単なる現実の追従に過ぎないのではないか。

もちろん、それぞれの人々が、それぞれの状況で、現実と戦い、あるいは折り合い、キリスト教徒であろうとして来たのだろう。しかし、「キリスト教界の多数派

も、イエスの教えを文字通りに読めば、それらは確かに非暴力主義・平和主義であると認めざるを得ない。しかし、現実には大多数はそのように振る舞えない」(137頁)と言われたとき、ではそれらの振る舞いは全て「キリスト教」として受け入れられるべきなのか。戦争と平和に対する態度について、何がキリスト教らしく、何がそうではないのか。それはもはや研究者としてではなく、信仰者としての価値判断となってしまうのだろうが、聞きたいところではあった。